

『エキセントリックスーパースター』川合弘祐

家を箱だと考えると部屋は箱の中に入っている箱ということになるのか。部屋の中心でダンボールをかぶっているのは箱の中の箱の中の箱ということになるのか。まるでマトリョーシカみたいだ。

食事と睡眠のとき以外はダンボールの中で過ごした。それは世界の情報を得ないようにするためだ。部屋にはテレビやネットのつながったものはない。

いつもと変わらずダンボールの中にいると部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。この時間に部屋を訪れるのは母でも父でもないというは分かっている。

部屋に入ることを許可する返事をするとうちのドアの開く音がした。おじさんはいつも僕の正面に座る。ダンボールで僕のことが見えていないはずなのに不思議だ。

以前は年に1回会うか会わないかだったけど、学校に行かなくなってからは月に2,3回ぐらい僕の部屋に来るようになった。同情からなのか姉である母に頼まれたからなのかはわからないけど嫌な思いはしなかった。部屋に来てする話といえば昨日の夕飯の話や近所で見た猫の話とかどうでもいいことばかりだ。

しかし本当に話さないといけないことがある。それは僕から言わないといけないことだろう。意を決してその話題に触れることにした。

「おじさん……僕は学校に行った方がいいと思う？」

おじさんなら当たり障りのない耳心地のいいことを言ってくれると思った。学校に行かなくてもいいという理由を並べて、今の僕の状況を肯定してくれるのではないかと。それを聞いて安心したかったんだ。しかし返ってきた言葉は予想していたものではなかった。

「君はどう思っているんだ？確認のために聞かせてくれないか？」

学校に行かず家に引きこもっている状態がいいわけない。わかりきったことをわざわざ言葉にしてどうなるのか。少し怒りを感じて語気が強くなった。

「部屋に引きこもっていていいはずがないことは僕が一番わかってるよ。なんで自分の口から言わせようとしてくるんだ。そんなの……よくないに思ってるにきまってるじゃん」

すぐにでも話すのをやめたかったけど、僕にはおじさんをこの部屋から出す力はない。ただダンボールの中で座って待つことしかできなかった。

「なるほど……そう考えているのか。いま君が言ったことは間違ってる。選択肢は沢山あるんだ。もっとこういう話を早くすべきだったのかもしれないな」

どこが間違ってるんだ。きっと説教くさいことを長々と聞かされるんだと思い、もう話を聞くのをやめようとした。しかしおじさんの言葉は耳を塞ごうとする手を止めさせた。

「いま君がいるこの部屋！被っているその箱！それこそが君の力になるんだ！それが分かってない！確かに人によっては学校に行った方がいい人もいるかもしれないが、君の場

合はその覆っているものこそがとてつもない力を発揮するんだ！」

予想した言葉と違いすぎて何をいってるのか分からなかった。脳が理解する前におじさんは何かを始めた。

「自分自身で立ち上がるチャンスを奪うのは良くないと思っていたが、少しだけ君の背中を押そう。えーと、ちょっとこれ借りるよ」

ダンボールの中からでは"これ"と言われても何か分からなかったけど"カチカチ"という音でそれがカッターだということがわかった。おじさんはダンボールを叩いて僕に指示を出した。

「こっちに後頭部をつけて！手はこの辺り！その姿勢で止まるんだ！絶対に動いちゃだめだぞ！」

それに従って姿勢を変えると、暗闇の中に光の線が浮かび上がってきた。ダンボールにカッターで切り込みを入れているのだろう。その線はまるで星と星とを繋いで描く、夜空に浮かぶ星座のように見えた。

その光の線を眺めているとダンボールの右側を叩く音がした。そこには丸い光の線があり、おじさんが何も言わなくても何をして欲しいのか分かった。

僕はその光の円に全力で腕を伸ばすと、ダンボールを突き抜け腕が箱の外に出た。しかし外に出たと思った腕は別のダンボールの中にあった。

そして左腕も同じようにダンボールを突き破った。箱の中にいて両腕を伸ばすことができるのは不思議な気分だった。

「うん！いいぞ！次は足だ！前に伸ばすんだ！」

座ったままダンボールから両足を伸ばした。そして両腕に続き、両足にも新たな形が与えられた。その瞬間、体が自然に動いた。力強く床を踏みつけたその両足はどんなことをされても動かせることはできない。そう思えるぐらい体に力が入った。

ここまでくると残っているパーツは1つだけだ。何も言われなくともどうすべきか分かる。僕は真上に頭突きをすると新たな空間に自分の頭が収まった。

視界は暗く何も見えない。見えないならばどうすればいいのか。やることは決まっている。視界を遮るものを取り除けばいいのだ。

僕はダンボールで作られた手で視界をこじ開けようとした。しかしなかなかうまくいかなかった。目の位置には切れ込みは入っていない。それでもただひたすら光を求めてダンボールを破ろうとした。

指の痛みを感じなくなるほどダンボールを引っ掻いたが思っていたより厚くて硬い。穴が開く気がしなかったけどそれでも続けた。どんどん体が熱くなっていくのを感じる。息も苦しくなってきた、額に汗が滲んできた。

その汗はダンボールに染み込み、ダンボールを柔らかくした。

暗い場所にいると瞳孔が大きく開いた状態になる。それは暗闇でもより多くの光を取り入れるためらしい。たどり着いたその光はとても眩しかった。しかし目を瞑ってしまうのは勿体無いほどに劇しく美しい光だった。

目が慣れてくるとおじさんの姿が見えた。自分の姿がどうなっているかわからなかったけど、おじさんの表情が鏡の役割を果たしていた。

おじさんが出した右手に僕はダンボールで覆われた右手で応えた。そのダンボール越しの握手が僕と世界の関係性を表しているように思えた。

箱型から人型に変形したことで立ち上がり歩くことが出来るようになり、なんとなく部屋の中を歩いてみた。ぐるぐると部屋をあてもなく歩く。そうすると部屋の扉の前についた。

ダンボールを着ている状態ではこの扉を開ける意味が変わる。風呂やトイレに行くためならばこれを着る必要はない。この状態で部屋の扉を開けた時、次を取る行動は玄関の扉を開けて家から出るということになるだろう。

試しにドアノブを握ってみた。しかし窓を見ると外はまだ明るい。暗くなるのを待った。

しかし夜になるまでにまだ時間がある。出来ることが何かないか考えて、僕は着ているダンボールを改造することにした。外では何が起きるかわからない。不測の事態が起こった時、重要なのは動きやすさだ。

ダンボールをカッターで切りガムテープを貼り組み合わせる。設計図など描かずに思いついたままに作っていった。

最初の頃よりスリムになったそれは動きやすくなり扉の向こうに行く不安を減らしてくれた。しかし集中してやっていたらいつのまにか日が昇っていた。再び夜になるのを待った。

夜といっても暗くなってから明るくなるまでの時間は結構長い。なるべく人に合わない時間にしようと思い、深夜2時に家を出ることに決めた。

しかしそんな時間に外を出歩くのは確実に両親を心配させる。家族に迷惑はかけたくない。部屋の窓から外に出ることにした。

人の出入りを想定した場所ではないところから外に出るということに不甲斐ない気持ちになったけど、家族に見つかるよりはいい。

深夜1時になりダンボールを装着し始めた。15分ほどで着終わってしまい、2時までにはまだ時間がある。ひとまず床に座り気持ちを落ち着かせた。

足から頭まで全身を覆うことで外から見たら誰だか分からない。それは僕にとって最高の状態だ。自分だったらできない行動も、自分でなければ出来る気がする。

10分前になり窓の前に立った。何度もした準備体操を再びした。雨が降っている様子はない。生まれた時から住んでいる町だから外に出ても道に迷うことはないだろう。

5分前。今日はやめておこうかという考えが浮かんだ。しかしこんな気持ちになることは想定していた。部屋にある鏡を見るとそこに自分ではない何かが写っていた。まるで他人事のように考えることでネガティブな気持ちを打ち消した。

1 分前になり時計の秒針を確認した。1 秒ずつ時間が経つごとに心臓の鼓動が速くなった。

30 秒前に窓の鍵を開けた。音を立てないようにゆっくり鍵を開けた。

10 秒前に窓を開けた。部屋に入ってきた空気が少し冷たかった。

5 秒前。左足を窓枠にかけた。

気がつくとも窓の外に立っていた。少しフライング気味だったかもしれない。ダンボールの隙間から流れ込む夜風は冷たいが、鼓動が早くなって熱せられた体にはちょうどよかった。

数秒立ち尽くしたあと振り返り、今し方自分が出てきた窓を見た。戻ろうと思えばいつでも戻れる。それも 1 つの選択肢だが、僕は窓に手をかけてゆっくり閉めた。

当たり前だけど人の気配はない。深夜 2 時は人の活動が止まっているのが感じられて少し安心できた。近所の公園には片道 10 分でいくことが出来る。そこは小学生の時によく行った場所で、今日はその公園に行き家まで帰ってくることを目標にして出発した。

夜道は完全に暗いわけではなく街灯で照らされているところもある。普通ならばその光は夜道を歩く時の助けになってくれるものだけど、今の僕にとっては正体を照らすスポットライトだ。

光を避け暗闇を移動して、ふと夜空を見上げると星が見えた。それが特別綺麗に見えたのはなぜなのか考えるのは後回しにして公園に向かった。

大きくない公園だから誰かいたらすぐにわかる。人がいないことを確認して公園に入った。

久しぶりに来た公園に懐かしさを感じながらも特にやることはない。帰ろうとした時、何かの気配を感じた。公園に入る前に人がいないことは確認した。その後、誰も来ていない。自分はかなり慎重な性格だと思っている。だからこそ、その光景に動揺した。

誰かが公園の隅にあるベンチに座っていた。

全身黒い服装をしているのはすぐに分かったが、何か違和感があった。その違和感を確かめることに夢中で足元に落ちていたものに気づけなかった。木の枝を踏んでパキッと音が鳴ったと同時にベンチに座っている人物がこっちを向いた。

その人物の顔には白い包帯が巻かれていた。ゲームや映画に出てくるミイラ男のような感じだ。

完璧に準備したと思っていても想定外のことは起こる。でもこれは想定していた想定外の中にはなかった。まさに想定外の出来事だ。こんな時に僕が取れる選択肢は 1 つしかない。これまでの人生で 1 番の力を振り絞って全速力で走って公園を出た。

僕に出来ることは逃げることでしかだから振り返ることもせずに走った。しかし何も考えずに全力で走ったせいで 10 秒ぐらいで体力が切れて、地面に座り込み日頃の運動不足を実感した。

もし追いかけてきていたらすでに追いついてきているはずだ。あの人物が僕より体力が少ないということはないだろう。しかし辺りを見渡しても包帯男は確認できない。

公園に向かう時に自分の味方だった暗闇が今は恐怖でしかなかった。どこに潜んでいるかも分からない。そのせいで歩みは慎重になり帰り道は行きより時間がかかった。

そしてやっとのことで家に着いた。出発した時とは違って今はとにかく部屋に入りたい。窓を開けるために手をかけた時だった。

窓のガラスに反射して自分の背後に人影が見えた。すぐに振り返ったがそこには誰もいなかった。きっと気のせいだろうと自分に言い聞かせてすぐに部屋に入り鍵をかけた。体力も精神力も完全に使い切った気がする。ダンボールを脱いで布団に入る力も残ってない。気を失うように眠りについた。

目を覚ますと体は筋肉痛でまともに動かすことができなかった。筋肉痛は筋肉が成長するために必要なものだ。成長するということは痛みが伴うことなんだな〜とぼんやり考えながら体を回復させることに専念した。

3日後。僕は再び窓の外にいた。時間は前回と同じ深夜2時。辺りは暗く人の気配はない。体調は万全で着ているダンボールも改良を加えて動きやすくした。一歩踏み出すための障害は何もない。

公園に行けば包帯男に再び会うかもしれない。あの時は逃げるという選択肢をとった。だから次は別の選択肢を選ぼう。対話出来るか分からないけどひとまずそれを目標としておこう。

僕は深夜の町に向かって足を踏み出した。